

日本ホワイトヘッド・プロセス学会 第34回全国大会
2012年9月8、9日 キャンパスプラザ京都

A. H. ジョンソンの三つのW —『ホワイトヘッドの機知と知恵』から—

九州産業大学大学院 猪原政治・伊藤重行

1. 目次

1. A. H. ジョンソンの紹介

2. *The Wit and Wisdom of Whitehead* の目的

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの機知と知恵」

2. *The Wit and Wisdom of Whitehead* の目的

1. A. H. ジョンソンが *The Wit and Wisdom of Whitehead* を著作した目的

- ① ホワイトヘッドの書物は、啓蒙をし、興味を引くが、鋭くてやや皮肉を含んだ機知に特徴づけられることを明らかにする！
- ② ホワイトヘッドの機知と格言的な知恵の代表的なサンプルを指摘し、それらの引用元を明記することで、読者を手助け！

⇒ ホワイトヘッドの生き生きとした格言と、光り輝く機知を示す試みでもあり、彼の人生と個性の素描はその理解を支援するでしょう

* 従って、ホワイトヘッド哲学の詳細で専門的な解説を求める人は、他の著作を探さなければならない。

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(1/7)

(1) エピソード概要

- ①20世紀において、数学と哲学の分野で最大の実績
- ②人間のつながりの領域において最高の卓越さを実現
- ③家族は教育、宗教、地方行政にかかわり、若くして、想像力の重要性を理解
- ④若い頃から、歴史、宗教、教育及び社会問題に関心
- ⑤ケンブリッジ大学での政治、宗教、哲学、文学でのソクラテスに関する議論が有益
- ⑥ケンブリッジでの職歴が、象牙の塔に棲んでいる学者のそれではない
- ⑦妻から影響を受け、生き生きとした人生は美、道徳的で美的なものが存在目的
- ⑧ロンドン大学では、現代の産業文明における高等教育の問題に取り組んだ
- ⑨ハーバード大学では、成熟した哲学的思弁の成果を出版する機会を得た
- ⑩現代人が直面する膨大な範囲の問題へ気づき、この偉大な人は、気楽な哲学者ではなかった

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(2/7)

(2) ホワイトヘッドの著作概要

- ① ホワイトヘッドの著作一覧は、強い感動を与えるとして、特に下記のことを記載
Principia Mathematica(ラッセルと共同)、*The Concept of Nature*、*The Principle of Relativity*、*Science and the Modern World*、*Religion in the Making*、*The Aims of Education*、*Process and Reality*、*Adventures of Ideas*、*Modes of Thought*。
- ② 数学は大きさの科学ではなく、全ての推論の一般的な根拠が影響する論理的な演繹にかかわる科学
- ③ 空間、時間、物質の伝統的概念に反対し、究極的な自然界の实在は、相互に関係する出来事から理解される能力(空間と時間はいれ物ではなく、出来事間の関係)
- ④ 著作の題材は、知性の範囲を劇的に広げることに関心させ、彼は究極の实在、宗教、人間の個性、価値、社会的組織、工業、教育、芸実の本質について議論
- ⑤ 我々の経験のあらゆる要素を解釈できるという、一般的で必然的なシステムの枠組みを構築、それは生命哲学に結びついた

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(3/7)

(3) 究極的な実在

- ①究極的な実在を理解することは、人間の本質と経験を慎重に吟味することが鍵
- ②感情、楽しみ、望み、恐れ、残念、選択肢の評価、決定の統一、すなわちこれら全ては、私の本性の環境に対する主体的な反応
- ③個々の楽しみは、私が環境における活動を新しい創造へ向けることを形作る天性の活動の役割であり、それは現在の自分でありながら、さらにそれは先立つ世界の継続
- ④人は環境的な事実の統一した経験
- ⑤成長中の人、必要な情報のみを選択、この自主的な自己啓発のプロセスは、特定の理想的な目標の理解によって導かれる
- ⑥宇宙は膨大な数の人々のようなものから構成されているとの見方
- ⑦実在は、経験の幅と深さの様々な程度を楽しむ人の多数のグループで構成され、これらの人々(現実的実質)は、他の人々との創造的な相互作用(抱握)の結果として出現

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(4/7)

- ⑧この過程は理解された理想(永遠なる客体)で導かれ、人間と無性物は必然的に創造的変化の過程を不可避的に受ける
- ⑨変化を導くような継続的変化の創造過程と永遠なる理想の双方は、人間経験の中で発見できるデータにすぎない

(4) 神の存在

- ①人間経験の考察は、「神」と呼ぶ現存在を明らかにする
- ②それらは、押しつけでなく、利用できるように単にそこにあり、心に描かれる観察者であり創造者である
- ③この存在の経験が心身の爽快と交わりの感覚をつくり出すために、「神」という言葉が使われる
- ④神の結果的本性と自己超越体の本性を明らかにしている
- ⑤神は圧倒的な力があるという観点からではなく、真・善・美の洞察力で忍耐強く導く世界の詩人

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(5/7)

(5) 哲学体系

- ①哲学体系の案出の際に、価値データ、宗教上の経験データ、及び自然科学・社会科学の事実を統合
- ②様々な科学的領域は明々白々な限界があるため、自然科学の事実のみへの集中を拒否
- ③歴史の単純な哲学は提供せず、多くの影響が作用していると主張
- ④実在には、二つのタイプ(心的、物的)が存在することを覆し、事実の現実世界において、そのギャップが存在しないことを示し続けた
- ⑤現実的実質における理論は、どんな実態もその発展過程において、「過去」と、「将来の目標達成の努力」から影響を受けるという主張を含む

(6) 個性と教育

- ①現在の大量生産システムは、人間の独創力の成長を妨げ、美的な鑑賞力は衰退し個性を破壊(どんな社会制度の有用さもその経験する価値に依存し、人間の価値を促進)
- ②もし人がまったく共通の生活に従属させられるならば、その人の成長を妨害

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(6/7)

- ③個性的な人間の重要性は、彼の根本主張であり、価値は現実のそれ自体に内在
- ④彼の人間経験の分析は、理解する能力であり、利用できる情報を使って新しさをつくり、それが他の人々の経験に寄与するという事実
- ⑤あらゆる人は宇宙において際立った差異を現し、その生命は本質的に協力的な活動
- ⑥学生は生きており、教育の目的は彼らの自己啓発を刺激して導くこと
- ⑦教育は知識の利用術の取得であり、専門と一般教養は対立ではなく協力の観点が重要
- ⑧科学における極端な力説は、いつか災害を引き起こす
- ⑨教育に関する議論の特徴は、美的経験の刺激的な規律上の価値を支持
- ⑩言葉に対する過度の信頼依存は危険、近代世界において言葉の関心によって、事実の関心を取り違える傾向あり
- ⑪大学は情報を想像豊かに授け、創造的な考察は知識を変え、すべての可能性に包まれた夢の詩人として、そして我々の目的の創始者として活力を付与
- ⑫文明社会で、人々が平和で共に生きることができることがホワイトヘッドの信念

3. A. H. ジョンソンから見たホワイトヘッド(7/7)

(6) 学生とホワイトヘッド

- ①彼は講義の中で、「私の本から私を理解することは危険ではないが、全てでもない」
- ②ハーバードの大学生達は、最小限の学問的難解さで啓発的に楽しませ、ポケットに手を入れて教壇をぶらぶら歩く英国紳士の優しい存在で魅了された
- ③学生は宇宙論と理性の機能だけでなく、機知の生き生きとしたひらめきを理解でき喜んだ
- ④「間違いを決してしない人は、何も決して作らない」、「法則は予言者の墓場」、そして「常識は月並みな才能」と言う、彼の独断的意見あり
- ⑤クラスに早く来たり、終了後も学生たちの私的な相談にのるユーモラスで熟練した先生
- ⑥週一時間の私的な時間が持てる大学院生は、ホワイトヘッド哲学を学んだのみでなく、さらに重要な哲学に対する考え方と、説明を超えた価値の世界を発展できた
- ⑦学生の自己実現を刺激することが教育の機能と考える親切な協力のおかげで、学生たちは短時間でいくつかの難しい点を研究できるようになった
- ⑧絶えず「生きた思想と共に生きている」先生は、本当にここにいる

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(1/7)

ホワイトヘッドの機知と知恵を9つの領域から提言(ホワイトヘッドの著作から抜粋)

- (1) **The Nature and Function of Philosophy**(哲学の本質と機能)
- (2) **Critical Comments Concerning Philosophers and Philosophy**
(哲学者と哲学に関する批評)
- (3) **Thought**(思考)
- (4) **Science**(科学)
- (5) **Morality**(道徳)
- (6) **Social Philosophy**(社会哲学)
- (7) **Philosophy of History**(歴史哲学)
- (8) **Religion**(宗教)
- (9) **Education**(教育)

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(2/7)

Thought(思考) 1/2

- ① **Faith in reason is the trust that the ultimate natures of things lie together in a harmony which excludes mere arbitrariness. It is the faith that at the base of things we shall not find mere arbitrary mystery. (S. M. W. p. 27)** 理性への信仰はすなわち、事物のもろもろの究極本質は相合して単なる恣意を許さない調和をなす、ということへの信頼である。またそれは、事物の根底に単なる恣意的神秘は存在しない、ということへの信仰である。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 25ページ。)
- ② **A clash of doctrines is not a disaster — it is an opportunity. (S. M. W. p. 266)** 思想の衝突は禍いでなくてむしろ福である。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 248ページ。)
- ③ **An attack upon systematic thought is treason to civilization. (A. I. p. 208)** 体系的思想への攻撃は、文明に対する反逆である。(『観念の冒険』, 山本誠作・菱木政晴訳, 221ページ。)
- ④ **It requires a very unusual mind to undertake the analysis of the obvious. (S. M. W. p. 6)** 分かりきった事柄の分析を企てるには、きわめて非凡な頭脳が必要である。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 6ページ。)
- ⑤ **An unflinching determination to take the whole evidence into account is the only method of preservation against the fluctuating extremes of fashionable opinion. (S. M. W. p. 268)** しかし証拠全体を考慮に入れずにはやまないという断乎とした決意のみが、左右に動揺する流行の意見に惑わされずに中正を持する唯一の道である。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 250ページ。)

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(3/7)

Thought(思考)2/2

- ⑥ **In the study of ideas, it is necessary to remember that insistence on hard-headed clarity issues from sentimental feeling, as it were a mist, cloaking the perplexities of fact. Insistence on clarity at all costs is based on sheer superstition as to the mode in which human intelligence functions. Our reasonings grasp at straws for premises and float on gossamers for deductions. (A. I. p. 91)** 観念の研究において、頑固で融通のきかない明晰さに固執することは、事実のさまざまな絡み合いをおおってしまういわばもやのようなものとして、感傷的な感じに起因しているのだということを銘記しておく必要がある。やみくもに明晰さに固執するのは、人間の知性が機能する態様についての、まったくの迷信に基づいている。われわれの理性的推論は前提として、わらをもつかもうとするものであり、演繹するためにくもの糸の上をただようものである。(『観念の冒険』, 山本誠作・菱木政晴訳, 97ページ。)
- ⑦ **Traditional ideas are never static. They are either fading into meaningless formulae, or are gaining power by the new lights thrown by a more delicate apprehension. They are transformed by the urge of critical reason, by the vivid evidence of emotional experience, and by the cold certainties of scientific perception. One fact is certain, you cannot keep them still. (S. M. W. p. 269)** 伝統的諸観念は決して不動ではない。それらは力衰えて意味のない公式と化するか、でなければ、いっそう緻密な把握によって新しい光を投げられ勢力を増していく。それらの観念は批判的理性に促され、情緒経験に現れる生き生きとした証拠や、科学的知覚の把える冷厳な事実によって、かたちを変えられる。これらを静止させて置くことはできない、という一つの事実は確かである。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 251ページ。)

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(4/7)

Religion(宗教) 1/2

- ① **That religion will conquer which can render clear to popular understanding some eternal greatness incarnate in the passage of temporal fact. (A. I. p. 41)** 時間的な事実の推移のうちに受肉しているある永遠的偉大さを一般的民衆が理解できるように明確ならしめうるような宗教が勝利をおさめるだろう。(『観念の冒険』, 山本誠作・菱木政晴訳, 43ページ。)
- ② **Religion is the vision of something which stands beyond, behind, and within, the passing flux of immediate things; something which is real, and yet waiting to be realized; something which is a remote possibility, and yet the greatest of present facts; something that gives meaning to all that passes, and yet eludes apprehension; something whose possession is the final good, and yet is beyond all reach; something which is the ultimate ideal, and the hopeless quest. (S. M. W. p. 275)** 宗教とは、眼前の事物の移り行く流れの彼方や背後や内奥に在る何ものか、実在しながらも現実化されるのを待っている何ものか、遠い彼方の可能態でありながら最大の現在の事実である何ものか、すべての移り行くものに意味を与えながらしかも捕捉し難い何ものか、握れば至上の福となるがしかも手の届かないもの何ものか、究極の理想であって望みなく探求を続けなければならない何ものか、のウィジョンである。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 256ページ。)
- ③ **Religion will not regain its old power until it can face change in the same spirit as does science. Its principles may be eternal, but the expression of those principles requires continual development. (S. M. W. p. 270)** 宗教も科学と同じ精神で変化というものに対決しえないかぎり、昔日の力を回復しないであろう。宗教の諸原理は永遠的なものではあろうが、これらの原理の表し方は絶えず発展しなければならない。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 252ページ。)

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(5/7)

Religion(宗教)2/2

- ④ **The task of Theology is to show how the World is founded on something beyond mere transient fact, and how it issues in something beyond the perishing of occasions. The temporal World is the stage of finite accomplishment. We ask of Theology to express that element in perishing lives which is undying by reason of its expression of perfections proper to our finite natures. In this way we shall understand how life includes a mode of satisfaction deeper than joy or sorrow. (A. I. p. 221)** <神学>の任務は、<世界>が、いかにして単なる移ろい行く事実を越えた何ものかに基礎づけられているかを示し、<世界>が、消滅していく諸契機を越えた何ものかにどう帰趨するかを示すことである。時間的なく世界>は、有限な達成の舞台なのである。われわれが<神学>に問い訊すのは、消滅していく生命のなかにおいても、われわれの有限な本性に固有の完成を表現するがゆえに、不死であるあの要素を表現することである。このようにしてわれわれは、生命がどのようにして喜びや悲しみよりも深い満足の相を含むかを理解するだろう。(『観念の冒険』, 山本誠作・菱木政晴訳, 234~235ページ。)
- ⑤ **The power of God is the worship He inspires. That religion is strong which in its ritual and its modes of thought evokes an apprehension of the commanding vision. The worship of God is not a rule of safety — it is an adventure of the spirit, a flight after the unattainable. (S. M. W. p. 276)** <神>の力は<神>が靈感を吹き込む礼拝にほかならない。この最高のヴィジョンの把握を呼び起こすような儀式と思想とを持つ宗教こそ強力である。<神>の礼拝は安全規則ではない。それは魂の冒険、到達し難いものを追い求める飛翔である。(『科学と近代世界』, 上田泰治・村上至孝訳, 257ページ。)

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(6/7)

Education(教育)1/2

- ① **The students are alive, and the purpose of education is to stimulate and guide their self-development. It follows as a corollary from this premise, that the teachers also should be alive with living thoughts. (A. E. p. v)** 学生たちは活気にあふれている。教育の目的とは、この活気ある学生の自己発達を刺激し、指導することだ。この前提から自然に導かれる結果として、教師たちもまた生命力ある思想をもって生きねばなりません。(『教育の目的』, 森口謙二・橋口正夫訳, vページ。)
- ② **Education is the acquisition of the art of the utilization of knowledge. (A. E. p. 6)** 教育とは知識の活用法を体得させることなのです。(『教育の目的』, 森口謙二・橋口正夫訳, 6ページ。)
- ③ **Culture is activity of thought, and receptiveness to beauty and humane feeling. Scraps of information have nothing to do with it. A merely well-informed man is the most useless bore on God's earth. What we should aim at producing is men who possess both culture and expert knowledge in some special direction. (A. E. p. 1)** 教養とは思考力の活動であり、また美と人道的感情に対する感受性なのです。ばらばらの知識は教養と何の関係もありません。ただの物織りなどは、この神の地に生まれて来なかった方がよかったです。私たちが育成を目指すべきは、教養と特殊領域の専門知識を兼備した人間です。(『教育の目的』, 森口謙二・橋口正夫訳, 1ページ。)
- ④ **The pupils have got to be made to feel that they are studying sometimes, and are not merely executing intellectual minuets. (A. E. p. 15)** 生徒たちには、自分が何か大切なことを学習しているので、ただ頭の舞踊をしているだけではないということを感じさせてやらねばなりません。(『教育の目的』, 森口謙二・橋口正夫訳, 14ページ。)

4. A. H. ジョンソンによる「ホワイトヘッドの 機知と知恵」(7/7)

Education(教育)2/2

- ⑤ **It must never be forgotten that education is not a process of packing articles in a trunk. Such a simile is entirely inapplicable. It is, of course, a process completely of its own peculiar genus. Its nearest analogue is the assimilation of food by a living organism: and we all know how necessary to health is palatable food under suitable conditions. (A. E. p. 51)** 教育が、かばんにものをつめこむ過程ではないということは、決して忘れられてはなりません。このようなたとえが、完全に適用できる訳ではありません。教育は、言うまでもなく独自の特別な種類の過程です。教育にいちばん近い類似例は、生命有機体による食物の消化です。私はだれでも、快適な環境の下に、食物をおいしく食べることが健康にどれほど必要かを知っています。(『教育の目的』, 森口謙二・橋口正夫訳, 50ページ。)
- ⑥ **The ultimate motive power, alike in science, in morality, and in religion, is the sense of value, the sense of importance. It takes the various forms of wonder, of curiosity, of reverence, or worship, of tumultuous desire for merging personality in something beyond itself. This sense of value imposes on life incredible labors, and apart from it life sinks back into the passivity of its lower types. (A. E. pp. 62-3)** 究極的にもものをいう力は、科学でも道徳性でも宗教でも同じことですが、価値についてのセンスであり、重要度についてのセンスです。このセンスはさまざまな形をとります。驚きとか、好奇心とか、畏敬の心とか、尊敬とか、自分を超越する何ものかに、自我を融合させたい激しい願望といった諸形式です。この価値に関するセンス如何が、人生に信じることもできないような苦勞を課し、また価値のセンスから離れるとき人生は程度の低い受動的なものに沈んでしまうのです。(『教育の目的』, 森口謙二・橋口正夫訳, 61ページ。)